

西洋中世史の解決すべき幾つかの大きな問題

佐藤彰一

*

- ①ヨーロッパ草原地帯の定住と国家形成
- ②バルカン半島の歴史的境位
- ③ローマ帝国からポスト・ローマ期・中世初期の国家への移行の問題
- ④中世における古代ギリシア思想の伝播をめぐる論争
- ⑤西暦千年の変動
- ⑥封建法・封建制社会論の脱構築
- ⑦イベリア半島におけるキリスト教文明とムスリム文明
- ⑧大西洋世界（北海、バルト海域を含む）の文明的構造
- ⑨忘れられた中世ユダヤ人社会の探求

① ヨーロッパ草原地帯の定住と国家形成

還流的民族移動

ユーラシア全図

著作権処理のため削除致しました。

出典元：林 俊雄『スキタイと匈奴 遊牧の文明』講談社、2007年刊より

キンメリア人、スキタイ人、サルマタイ人、フン人、アラン人、アヴァール人、スラブ人、ブルガール人、マジャール人、トルコ人、モンゴル人 etc.

著作権処理のため削除致しました。

出典元：K. Kristiansen, *Europe before History*, Cambridge, 1998

朝日百科『世界の歴史』31. 森安達也「バルカンのスラブ化」

② バルカン半島の歴史的境位

トルコのヨーロッパ部分、ギリシア、アルバニア、ブルガリア、旧ユーゴスラビア（マケドニア共和国、セルビア、モンテネグロ、クロアチア、ボスニア・ヘルツゴビナ）

ローマ帝国の属州名で言えば、マケドニア、トラキア、モエシア、ダキア、ダルマティア

著作権処理のため削除致しました。

出典元：P. Petit, *Histoire générale de l'empire romaine*, Seuil, 1974.

- ①バルカン半島の先住民族：トラキア人、ゲド＝ダキア人、イリュリア人それに現在のオーストリアに近い地方にはケルト人
- ②バルカン半島のローマ同盟軍とゲルマン人：サルマティア人、アラン人などの遊牧民族や、ゲルマン系のゴート人、ゲピド人、クワディ人、ヘルリ人、ヴァンダル人
- ③バルカン半島のスラブ化：セルビア人やクロアチア人などのスラブ系民族が、カルパチア山脈の北から進出して、バルカン半島北部の地中海に臨む海岸地帯のダルマティアを支配した
- ④オスマン・トルコ人

著作権処理のため削除致しました。

出典元：中世初期ヨーロッパの長柄スキ（1）と短柄スキ（2）の分布 Florin Curta (ed.) East Central & Eastern Europe in the Early Middle Ages, The University of Michigan Press, 2005.
Zbigniew Kobylnski, The Slavs, in The NCMH, 1, Cambridge, 2005

③ゲルマニストとロマニストの対立：日本の学界はドイツ史学の影響もありゲルマニスの見解が支配。1960年代からロマニスト優位に旋回。ヨーロッパ財団の「ローマ帝国の変容」プロジェクト（1996-2000）。征服王朝であったフランクはローマ的インフラとローマ理念の継承者。7世紀以降社会のゲルマン化顕著となる。そこで歴史学はメロヴィング朝フランク時代の「ポスト・ローマ的特徴」を無視するか、否定し、中世ヨーロッパは初めから「ゲルマン的」であったと主張。これでは「ゲルマン民族侵入」直後はローマ的で、「ゲルマン民族侵入から隔たった時代により濃厚に「ゲルマン的」であるという逆立ちした現象が説明できない。言ってみれば7世紀から顕著となる「再ゲルマン化」は、6世紀の歴史記録に留められていない、民族移動期よりも遥かに大量のゲルマン系諸民族の西方への、つまりはフランク世界周縁部への移動があったという推定を許す。ゲルマン人の大量の西への移動が、6世紀のスラブ人の急速な膨張を許した。ゲルマン人が出発し、真空地帯となった空間の大量存在が、西に向ったスラブ人の移動の理由であった。

④ 中世における古代ギリシア思想の伝播をめぐる論争

通説的見解：1927年に合衆国の中世史家チャールズ・ホーマー・ハスキングスが、その著書『十二世紀ルネサンス』によって確立した見解。西ローマ帝国の崩壊以後、西方世界の文化的凋落は著しく、とりわけギリシア世界の知的遺産の継承は見る影もなく衰退し、ゲルマン人の部族国家では、かろうじてローマ末期にラテン語に翻訳された作品が、写本として西欧各地の修道院で筆写され続けただけでした。このような文化状況に転換がおとずれしたのは、12世紀中頃であり、とくに13世紀以降のトマス・アキナスやアルベルト・マグヌスのような、近代哲学の祖となる論理学者たちの業績はアリストテレス哲学なしにはあり得なかったものでした。その意味でアリストテレス哲学が西洋で再発見されたのは決定的に重要な事件でした。1085年にスペインで、イスラーム教徒からトレドが奪回されると、トレド大司教ライムドゥスとその後継者ヨハンネスが、ここにアラビア語文献のラテン語への一大翻訳センターを組織して、大量の写本を生み出しました。アリストテレスの『自然学』を初め、最重要の哲学文献が、イスラーム哲学者アヴェロエスによるアリストテレスの註釈とともにアラビア語から翻訳され、アリストテレスの業績が本格的に西洋にもたらされ、その

かけがえのない知的財産になった。西洋の知的伝統の最重要部分が、イスラーム文明に大きく負っているとする見方が定説として確立した。

異論の出現：シルヴァン・グーゲネム (Sylvain Gougeenheim) の著書 *Aristote au Mont-Saint-Michel. Les racines grecques de l'Europe chrétienne*, “L'Univers Historique”, Seuil, 2008.

- 1) トレドの翻訳センターが稼働する前に、「ヴェネツィアのヤコブス」がモン・サン・ミシェル修道院でアリストテレスの『自然学』をギリシア語から直接ラテン語に翻訳している。
- 2) 西欧において古代ギリシア思想についての関心は途切れずに続いていた。
- 3) 古代ギリシアの哲学は、イスラーム社会に包摂されたシリア人キリスト教徒によりシリア語に翻訳された。そこから必要に応じてアラビア語に翻訳された。イスラームの代表的な哲学者アヴェロエス、アヴィケンナらは古典ギリシア語を解しなかった。
- 4) イスラーム教の強固な宗教的イデオロギーの拘束のもとでは古代ギリシア思想から、叡智を汲み取り、その知的成果を発展させることは困難であった、とするイデオロギー的主張。批判と非難はここに集中。

今後の学問的課題：一方でカロリング・ルネサンス以後のギリシア思想とギリシア文化の中世ヨーロッパ社会・文化への浸透の諸相を明らかにすること、他方でアリストテレス哲学の必要性、有用性がいかなる現実的要素によって高まったのかを明らかにすること。

[参考文献]

佐藤彰一『中世世界とは何か』岩波書店, 2008年。

Kristian KRISTIANSEN, *Europe before History*, Cambridge, 1998; Anthony F. HARDING, *European Society in the Bronze Age*, Cambridge, 2000.

林俊雄『スキタイと匈奴。遊牧の文明』, “興亡の世界史2”, 講談社, 2007年。

Iaroslav LIBEDYNSKY, *Les Saces. Les “Scythes” d'Asie, VIII^e siècle av. J.-C. —IV^e siècle après J.-C.* Éditions Errance, 2006.

Florin KURTA, *The Making of the Slavs. History and Archaeology of the Lower Danube Region, c.500-700*, Cambridge, 2001.

Id. (ed.) *East Central and Eastern Europe in the Early Middle Ages*, The University of Michigan Press, Ann Arbor, 2005.

Id. *Southeastern Europe in the Middle Ages, 500-1250*, Cambridge, 2007; id. (ed.) *The Other Europe in the Middle Ages. Avars, Bulgars, Khazars and Cumans*, Brill, Leiden /Boston, 2008.

Johachim HENNING (ed.), *Post-Roman Towns, Trade and Settlement in Europe and Byzantium*, 2 vol. “Millennium-Studien”, Walter de Gruyter, Berlin / New York 2007.

Zbigniew KOBYLINSKY, “The Slavs” in *New Cambridge Medieval History*, Cambridge University Press, 2005, vol.1.

Michel KAZANSKI, *Les Slaves. Les origines, I^{er}-VII^e siècle après J.-C.* Edition Errance, Paris, 1999.

Walter POHL, *Die Awaren. Ein Steppenvolk in Mitteleuropa, 567-822n.Chr.*, C. H. Beck, 1988.

C. H. ハスキンス, 別宮貞徳／朝倉文市訳『十二世紀ルネサンス』, みすず書房, 1989年。

Sylvain GOUGUENHEIM, *Aristote au Mont-Saint-Michel. Les racines grecques de l'Europe chrétienne*, “L'Univers Historique”, Seuil, 2008.

Peter GODMAN, *Poets and Emperors Frankish Politics and Carolingian Poetry*, Clarendon Press, Oxford, 1987.

瀬戸一夫『時間の思想史-アンセルムスの神学と政治-』勁草書房, 2008年。